

研究代表者 所属・職：健康科学部・教授

氏 名：福田 秀志

研究課題名：東海市加木屋緑地を魅力ある緑地にするための整備提案

研究の目的

■東海市では、「21 世紀の森づくり事業」という「ふるさとの森」をつくり、広げて、次世代に引き継いでいくことを目的とした事業が展開されている。本研究で対象とする、加木屋緑地は、その中の中心的な拠点として位置づけられている。申請者は、これまで加木屋緑地公園の整備計画について助言を行ってきた。その際、これまで東海市では発見記録が非常に少ない知多半島の象徴種であるキツネが加木屋緑地内に訪れていることが分かったが、詳細な調査は行われていない。加木屋緑地をより魅力的な緑地にするには、象徴種であるキツネが訪れる緑地にすることが重要と考えられる。そこで、本研究では、まず加木屋緑地におけるキツネの生息状況とキツネが定着している周辺地域からどのように移動しているかを、カメラトラップ調査によって明らかにする。その結果をもとに、キツネを定着させるには、どのような整備が必要なのかを、今後の整備が予定されている「成長の森ゾーン」を中心とした整備提案を行う。

プロジェクト目標の達成状況・成果内容

■カメラトラップの調査の結果から、キツネは散策の森で最も多く撮影された。散策の森に植栽された樹種を見てみると、エノキ、ヤマモモが他のゾーンよりも多い。キツネの食性からカキ、ヤマモモ、ビワなどが挙げられる。以上の結果から、ヤマモモ、エノキがキツネの生息に関係している可能性がある。また、散策の森のみでノウサギが撮影され、それを捕獲しに来ていた可能性がある。

■成長の森の整備案として、最上段を森林ゾーンとし地域の樹種でありキツネも摂食できるどんぐりを実らせる常緑広葉樹のツブラジイを植栽

し、亜高木として散策の森で多く植えられ果実も実らせるエノキを植栽し、その下層では常緑広葉樹で隠れ家となるキツネの主要な餌となるヤマモモを植栽する。2 段目の層は草原とし、散策の森で認められたノウサギが生育できるように草地を設け、同時にハタネズミの生息も促す。また、キツネの餌となるノイチゴも導入する。最下層は水辺・湿地とし、キツネの水飲み場として、水溜り程度の池を想定し、湿地エリアを大きくすることを提案した。

優れた成果があがった点

■東海市では、加木屋緑地公園の造成の際の環境アセスでの 1 度の記録を除き、2003 年以来 15 年ぶりにキツネの生息を確認した。キツネが複数回撮影されたのは、「21 世紀の森づくり事業」で植栽本数が最も多い散策の森で、この事業がキツネの誘致に大きく寄与していることを強く示唆した。本研究の結果を基に、今後、さらなる整備が計画されている、成長の森の整備提案ができたことは大きな成果である。

研究期間終了後の今後の展望

■本研究では、同時に、東海市近くで捕獲されたキツネが東海市にどのルートを通って移動しているかも調査する予定であったが、キツネの捕獲が、本調査期間終了間際であったため、そこを明らかにすることはできなかった。今後は、捕獲されたキツネに装着した G P S 首輪から得られる情報を基に、東海市を含むキツネの移動ルートを明らかにすることにより、東海市を含む知多半島内の緑化すべき（生態系をネットワークすべき）地域を明らかにしていく。